

《芦屋市文化財調査報告第44集》

徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ

岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書

—芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査—

2003年2月

芦屋市教育委員会

徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ

岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書

－芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査－

2003年2月

芦屋市教育委員会

序

織豊政権から江戸開幕、そして徳川氏幕藩体制確立にかけての世の動きは、日本近世の揺籃期でもあり、激動の時代とされています。

慶長5年（1600）9月の列島を二分した関ヶ原の大合戦の結果、徳川家が覇権をにぎり、敗退した西軍諸大名の所領の没収・削減、東軍諸大名の増封に加え、徳川氏の直轄領は実に300万石に成長したと聞きおよんでいます。

この過程で大坂城の防衛拠点として重要度を高めた尼崎もその直轄下におかれ、大坂の陣後はこの芦屋地方も直轄の支配関係がおよんだと考えられています。元和3年（1617）には幕藩体制下の大名領となり、尼崎藩主として譜代の戸田氏鉄が入部、土木・治水に優れた氏鉄は、徳川修築大坂城の築城総奉行を担い、その関係から、わが芦屋を含めた東六甲の山間部が最大の石垣石材の供給地になった経緯が導き出されます。その供給率は現大坂城石垣の50%を越すという報告もあって驚きを禁じ得ません。

本書で報告する西国肥前唐津藩寺澤家丁場の採石場も、この徳川氏の大坂城の巨大採石場の一画を占めるものであり、40年近い長い調査の歴史を通じて、初めて石工の活躍が手にとるようになるような遺構の数々の検出に恵まれました。

調査関係者の粘り強い整理と各専門分野の先生がたの珠玉の分析と考証がこうして早期に実り、現地の発掘終了後、学術性の高い調査報告書がすばやく上梓されたことを心から慶び、その成果が本市独特の歴史資料として広く末永く、公けに活用されることを望みます。

公共衛生施設建築の事前調査となった今回の調査に、種々ご協力をいただきました芦屋市水道部と、調査・整理の事業に参画された多くのひとびとに対し、厚く感謝の意を表し、序の一文といたします。

平成14年7月31日

芦屋市教育長 三浦 清

はじめに

芦屋市域で大坂城石垣採石地が発見されて以来、芦の芽グループの精力的な分布調査がはじまった。30余年を経過して、採石大名達の採石場も整理することが可能になった。芦屋市史の編纂に関連して、市内の邸宅の石垣や庭石に刻印を打った石がみられるので、一応集成をした。情報を得て神戸や西宮市域の邸宅の刻印石を調査したことも懐かしい。

昭和31年以来、会下山遺跡の発掘調査を担当することになったが、その間にも3ヶ年に亘る四天王寺の発掘調査で、金堂・五重塔・南大門の調査を担当し、寸暇を会下山遺跡の発掘調査に当てる日々であった。その際、南大門址で刻印のある石垣・礎石を検出した。何れも徳川家光再建時の遺構からであった。

昭和34年になって、大坂城外濠の水が急激に減少した。「地盤沈下のせいでは?」「工業用水汲み上げのせいでは?」と噂されていたが、これを機に大坂城総合学術調査を実施しようということになった。会下山遺跡を調査中の関西学院大学考古学研究会及び芦屋市立山手中学校の有志諸君の協力で、地上約50万個の石垣石刻印の分布調査を行なった。調査した石垣上面の総距離11.2km、石垣壁面 283壁面、境刻線（分担大名の丁場境界線）73本、石垣刻印は1247種類に及ぶことが判明した。この際、細川家の丁場にのみ「あしや」という文字刻印があり、注目した。

当然、読売新聞社西日本本社・福岡県教育委員会で「北九州の芦屋で採石の事実」を調査してもらったが、「採石の事実・痕跡は無い」との返事であった。

会下山遺跡の発掘調査が終り、兵庫県史蹟第1号に指定されたあと、山手中学校卒業生のうち、同好の志は「芦の芽グループ」を結成し、近隣各大学の学生達も参加し、市内各地域・西宮市内各地域をはじめ、高槻市大蔵司古墳群、吹田市片山古墳、尼崎市水堂古墳、吹田市万博会場予定地瓦窯（太陽の塔の場所）、尼崎市若王寺遺跡、田能遺跡など尼崎市域の主要遺跡の発掘調査に協力していただいた。阪神間における最初の文化財保護と調査研究のグループであった。

昭和44年、新修芦屋市史の編集に関連して、大坂城石垣の刻印の再調査をおこなった。芦の芽グループが中心であった。これによって、徳川幕府による元和9年、寛永元年、寛永5年の三回にわたる大工役と64家の大名の丁場が判明した。

昭和34年に、本丸地表下9.35mで検出した「野づら積み」の石垣は、徳川幕府以前の石垣

で、石山本願寺、豊臣大坂城に結びつくことも確信した。

第2回目の大坂城石垣調査以来、芦の芽グループを中心に表六甲山系で採石場発見と調査が続き、芦屋市教委の積極的な発掘調査によって、遂に大名達の採石場の位置、採石にともなう石工たちの鍛冶炉跡や飯場、規格石材切出しの順序などの詳細が明らかとなった。徳川大坂城石垣築造に動員された65家の大名達の半数近くが、表六甲山系で採石した事実と、物凄い量の採石によって、どれ程の荒れ山と化したであろうという思いが重なる。改めて、築城を命じた権力、命ぜられた大名達の必死の奉公、動員された武士と民衆、荒れ山を放置された住民の被災などを考えると、城を築かねばならなかった時代の人々に幸福な日々があったのであろうかと想う。

現状では、芦屋市域で細川家の採石場は確認されず、「あしや」の刻印も見つかっていない。小倉藩の符号として、芦屋市以外の採石場で打たれたものようである。

今回の報告書には、従来の調査方法に対する反省をこめて、採石場調査の方法論、調査目的、採石に従事した人々の現地キャンプの状態など、新発見の事実も盛られている。

村川 行弘（芦屋市文化財保護審議会委員・大阪経済法科大学名誉教授）



第1図 昭和44年の大坂城石垣刻印調査風景

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成13年度に実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群（第12次）調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、芦屋市水道部が計画する六麓荘浄水場高区配水池の築造に伴い実施したもので、現地調査および資料整理・報告書作成にかかわる費用は、全額水道部が負担した。
水道部工務課山岸 悟氏・木島昌彦氏には、調査全般にわたり御配慮いただいた。
3. 調査対象遺跡は、近世初頭（1620年代）の徳川幕府による大坂城再築に関わる採石場である、「徳川大坂城東六甲採石場」のうち、「岩ヶ平刻印群」の一角で、芦屋市六麓荘浄水場（芦屋市字劔谷3番地）の構内である。
4. 発掘調査は芦屋市教育委員会を主体とし、担当者として森岡秀人（芦屋市教育委員会文化財課主査）、および古川久雄（摂陽文化財調査研究所）が事にあたった。
5. 発掘調査にあたっては、森岡秀人の指示・指導の下、主として古川久雄が担当し、補助員として須藤 歩（現財元興寺文化財研究所研究員）・島田裕弘（現財大阪府文化財センター専門調査員）・松本貴子・西牟田真希の参加を得た。調査の体制は次のとおりである。

調査主体 芦屋市教育委員会

教 育 長	三浦 清（責任者）
社会教育部長	小治 英男（総 括）
文化財課長	西川 孝男（統 轄）
文化財課主査	森岡 秀人（学芸員・調査担当・調査事務）
文 化 財 課	田中 尚美（庶務・整理事務）
文 化 財 課	竹村 忠洋（学芸員）

現地調査および資料整理

主任調査員	古川 久雄（摂陽文化財調査研究所・調査担当）
調査補助員	須藤 歩・島田 裕弘・松本 貴子・西牟田 真希・濱野 俊一

6. 資料整理および調査報告書作成作業は、芦屋市水道部浜資材倉庫の一室を利用（平成14年5月～7月）して行った。この作業には、担当者・補助員全員に加えて、新たに濱野俊一（元大阪府茨木市教育委員会文化財担当嘱託、現奈良県香芝市立二上山博物館嘱託調査員）が参加した。
7. 鍛冶炉跡周辺より出土した鉄滓・鍛造剥片等の鍛冶関連遺物については、大道和人氏（財滋賀県文化財保護協会）および大沢正己氏（たたら研究会委員）に分析調査を依頼し、玉稿をいただいた。また先山 徹氏（姫路工業大学自然・環境科学研究所助教授、兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）と松田順一郎氏（財東大阪市文化財協会）にも、現地調査のうえ岩石学・堆積学の分野で専門的な所見を執筆いただいた。
8. 本書の執筆は、森岡・古川・濱野が主に担当し、調査成果の一部については須藤・島田・松本が分担した。また、今回の調査から浮かび上がるいくつかの問題点について、永井久美男（兵庫埋蔵銭調査会）・奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所研究員）・北野博司（東北芸術工科大学助教授）・大国正美（神戸深江生活文化史料館副館長）・藤井重夫（築城史研究会代表）の各氏より玉稿をいただいた。これらを含め、執筆分担については目次および各文末に明記している。
9. 写真図版のうち、図版42の土器・陶磁器・銭貨の撮影は島田が担当し、その他の遺構・遺物については古川が撮影した。

10. V章調査成果に掲載した遺構・遺物の図面は、調査員・補助員全員の分担・協力で測図し、製図には主として島田・松本があたった。また、Ⅲ章1に使用した地質図の製図は須藤が担当した。
11. IV章およびⅦ章2等に使用した挿図写真のうち、大部分は古川撮影資料であるが、第1図・第12図⑤⑦・第21図・第30図⑦は藤川祐作氏、第24図①②は松田一義氏撮影のものである。貴重な写真資料を提供された両氏に対し、記して謝意を表したい。
12. IV章およびⅥ章2に掲載した刻印拓本は、すべて古川の手によるものである。
13. 第5・9・11・22・85図に掲載した地図類は、以下のものを使用・編集した。
 国土地理院発行 1：50,000地形図『大阪西北部（京都及大阪12号）』平成8年2月
 芦屋市発行 1：2,500基本図『劔谷』『六麓荘』『苦楽園口』平成10年 株式会社パスコ調製
 西宮市発行 1：2,500都市計画図『劔谷』『甲陽園』『苦楽園口』平成11年 株式会社ジオテクノ関西調製
14. 本書の編集は、森岡・濱野の協力のもと、主として古川が担当した。
15. 大坂城の「坂」の字は、歴史的用語として「坂」に統一し、大阪市の「阪」と区別した。
16. 本書に御執筆いただいた方々のほか、次の方々にも現地調査や資料整理の過程で様々な御教示・御指導・御協力を賜った。記して謝意を表しておきたい。

浅岡俊夫（六甲山麓遺跡調査会）	尾原隆男・平川大輔（築城史研究会）
西山昌孝（大阪府千早赤阪村）	北垣聰一郎（奈良県立橿原考古学研究所研究員）
藤原清尚（加古川市教育委員会）	西川卓志・合田茂伸（西宮市立郷土資料館）
藤川祐作（芦の芽グループ）	多賀晴司（財大阪府文化財センター専門調査員）
久保 孝（京都女子大学附属小学校教諭）	十菱駿武（山梨学院大学教授）
内山孝男（伊奈石研究会）	今尾文昭・今津節生（奈良県立橿原考古学研究所）
尾上 実（元大阪府教育委員会）	若林純也（元芦屋市教育委員会文化財担当嘱託）
山村 薫（京都市役所）	富田和気夫（財石川県埋蔵文化財センター）
渡辺 昇（兵庫県教育委員会）	入江康太（関西学院大学考古学研究会）
松田一義（元芦の芽グループ会員）	山道祐美子（京都教育大学卒業生）
仲谷由利子・梅本素子・高橋美代子・多田尋美・岡本美樹子（芦屋市教育委員会臨時職員）	

（順不同）



第2図 芦屋市の位置

徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ
岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書

－ 芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査－

目 次

序	……………	(三浦 清)	
はじめに	……………	(村川行弘)	
本文目次・図版目次・挿図目次・表目次			
I. 序説	……………	(森岡秀人)	1
II. 調査の発端と経緯について	……………	(森岡)	8
III. 地理的・歴史的環境と市域北東部の埋蔵文化財	……………	(濱野俊一)	11
1. 地理的・地質的環境	……………		11
2. 歴史的環境と周辺の遺跡	……………		12
IV. 徳川幕府による大坂城再築と東六甲採石場	……………	(古川久雄)	17
1. 徳川幕府による元和・寛永期の大坂城再築と石垣石	……………		17
(1)豊臣大坂城と徳川大坂城	……………		17
(2)現存大坂城石垣と採石丁場	……………		20
2. 徳川大坂城東六甲採石場	……………		23
3. 岩ヶ平刻印群	……………		27
(1)調査密度の高い岩ヶ平刻印群	……………		27
(2)採石場発掘調査の進展と採石遺構の検出	……………		27
(3)「伊木三十郎」刻印について	……………		29
(4)岩ヶ平刻印群における採石大名と採石領域	……………		30
(5)呉川遺跡と赤穂藩池田家の刻印	……………		33
V. 調査成果	……………		46
1. 調査の方法と経過	……………	(古川)	46
2. 地形測量調査の結果	……………	(古川)	52
3. トレンチ調査の所見	……………	(古川)	59
4. 検出遺構	……………		61
(1)遺構の配置	……………	(古川)	61
(2)採石遺構	……………		62
①花崗岩採石遺構の概念と残材の形状による分類	……………	(古川)	62

②採石遺構 I	…………… (島田裕弘・古川)	63
③採石遺構 II	…………… (須藤 歩・古川)	74
④採石遺構 III	…………… (古川)	78
⑤採石遺構 IV	…………… (島田・古川)	79
⑥採石遺構 V	…………… (古川)	86
⑦その他の関係石材	…………… (古川)	86
(3)建物遺構	…………… (松本貴子・古川)	88
(4)鍛冶炉跡	…………… (古川)	91
5. 出土遺物	…………… (濱野)	95
(1)土器・陶磁器類	……………	95
(2)銭貨類	……………	97
(3)鍛冶関連遺物	……………	98
VI. 自然科学的分析調査の結果	……………	103
1. 鉄滓と鍛造剥片・粒状滓の観察	…………… (大道和人)	103
2. 鍛冶炉周辺出土鉄滓及び微細遺物の金属学的調査	…………… (大澤正己)	111
3. 六甲花崗岩の分類研究・特性からみた石垣石材	…………… (先山 徹)	130
4. 岩ヶ平刻印群第12次調査地の地形・地質条件と土石流堆積物	…………… (松田順一郎)	136
VII. 考察	……………	142
1. 寺澤志摩守廣高と近世初期唐津藩の動向	…………… (古川)	142
2. 六麓荘浄水場北方山林地域分布調査の成果	…………… (古川)	143
3. 近世鍛冶炉の構造概観と検出鍛冶遺構の性格	…………… (森岡)	151
4. 採石遺構IV出土の備前摺鉢について	…………… (濱野)	154
5. 絵銭について	…………… (永井久美男)	158
6. 出土須恵器の年代・性格と終末期古墳遺存の可能性について	…………… (森岡)	160
7. 石材別にみた採石方法と花崗岩利用	…………… (奥田 尚)	163
8. 石切丁場の調査と保存	…………… (北野博司)	165
9. 文献にみる近世初頭の採石場の変質と豊臣・徳川両大坂城	…………… (大国正美)	166
10. 徳川大坂城再築に伴う採石場遺跡発掘調査への期待と提言	…………… (藤井重夫)	168
VIII. まとめー今後の採石場調査に向けてー	…………… (森岡・古川)	170
参考文献一覧	……………	175
写真図版	……………	181
報告書抄録		
あとがき		

図版目次

図版1	発掘前の状況①	上	調査地遠景 (西から)	図版23	採石遺構Ⅳ⑤	上	23号石材と備前摺鉢(南西から)
		下	調査地全景 (北西から)			下	備前摺鉢出土状況 (南西から)
図版2	発掘前の状況②	上	調査地北部 (北西から)	図版24	採石遺構Ⅳ⑥	上	南西斜面検出状況 (南西から)
		中	調査地南部 (北西から)			下	25号石材 (北西から)
		下	調査地全景 (南から)	図版25	採石遺構Ⅳ⑦	上	24号石材 (南西から)
図版3	採石遺構Ⅰ①	上	採石遺構Ⅰ全景 (南から)			中	26号石材 (南東から)
		下	採石遺構Ⅰ北部 (西から)			下	27・28号石材 (南東から)
図版4	採石遺構Ⅰ②	上	6・10号石材 (北西から)	図版26	採石遺構Ⅴ①	上	遺構現状全景 (北東から)
		下	6・12・13号石材 (南から)			下	遺構現状全景 (西から)
図版5	採石遺構Ⅰ③	上	6号石材 (南東から)	図版27	採石遺構Ⅴ②	上	小割石遺存状況 (北東から)
		下	6号石材 (北東から)			下	小割石遺存状況 (北から)
図版6	採石遺構Ⅰ④	上	7号石材 (発掘前 南から)	図版28	その他の関係石材①	上	1号石材 (南東から)
		下	7号石材 (西から)			下	3号石材 (東から)
図版7	採石遺構Ⅰ⑤	上	7号石材 (北から)	図版29	その他の関係石材②	上	2号石材 (北東から)
		中	7号石材 (東から)			下	2号石材 (南東から)
		下	7号石材 (西から)	図版30	その他の関係石材③	上	29号石材 (南から)
図版8	採石遺構Ⅰ⑥	上	9号石材 (西から)			下	31号石材 (南から)
		下	9号石材 (東から)	図版31	掘立柱建物①	上	検出状況全景 (北西から)
図版9	採石遺構Ⅰ⑦	上	9号石材北鉄滓5出土状況			下	検出状況近景 (北西から)
		下	8号石材 (南西から)	図版32	掘立柱建物②	上	検出状況近景 (南から)
図版10	採石遺構Ⅰ⑧	上	10号石材 (西から)			下	検出状況近景 (東から)
		中	11・12号石材 (南から)	図版33	掘立柱建物③	上	検出状況全景 (北東から)
		下	11・12号石材 (北東から)			下	検出状況全景 (北から)
図版11	採石遺構Ⅱ①	上	全景 (発掘前 南西から)	図版34	掘立柱建物④	上	東列石検出状況 (東から)
		下	14号石材 (発掘前 南西から)			中	東列石検出状況 (北から)
図版12	採石遺構Ⅱ②	上	上面間知石と小割石群			下	東列石近景 (北東から)
		中	14・15号石材と小割石群	図版35	掘立柱建物⑤	上	北部柱穴群 (北西から)
		下	小割石群検出状況 (南から)			下	北部柱穴群 (北から)
図版13	採石遺構Ⅱ③	上	検出状況全景 (南西から)	図版36	鍛冶炉跡①	上	鍛冶炉跡1・2全景 (北西から)
		下	検出状況全景 (西から)			下	鍛冶炉跡1全景 (北西から)
図版14	採石遺構Ⅱ④	上	14号石材 (西から)	図版37	鍛冶炉跡②	上	鍛冶炉跡1灰層上面検出状況
		下	14号石材 (北西から)			中	鍛冶炉跡1灰層断面
図版15	採石遺構Ⅱ⑤	上	15・16号石材 (南から)			下	鍛冶炉跡1鉄滓2出土状況
		下	15・16号石材 (北から)	図版38	鍛冶炉跡③	上	鍛冶炉跡1完掘状況 (北西から)
図版16	採石遺構Ⅱ⑥	上	15・16号石材 (西から)			下	鍛冶炉跡1完掘状況 (南東から)
		中	15・16号石材近景 (南から)	図版39	鍛冶炉跡④	上	鍛冶炉跡2全景 (南東から)
		下	15・16号石材近景 (西から)			中	鍛冶炉跡2近景 (北東から)
図版17	採石遺構Ⅲ①	上	畦土層断面 (南から)			下	鍛冶炉跡2鞆羽口出土状況
		下	検出状況全景 (南西から)	図版40	第2トレンチ	上	発掘状況全景 (南東から)
図版18	採石遺構Ⅲ②	上	検出状況全景 (西から)			中	発掘状況近景 (東から)
		下	検出状況全景 (北から)			下	流路跡砂層 (南東から)
図版19	採石遺構Ⅳ①	上	検出状況全景 (南西から)	図版41	第3トレンチ	上	発掘状況全景 (南西から)
		下	検出状況近景 (南西から)			中	流路跡砂層 (南から)
図版20	採石遺構Ⅳ②	上	検出状況近景 (南から)			下	建物跡部分 (南から)
		下	検出状況近景 (西から)	図版42	出土遺物①	土器・陶磁器・銭貨	
図版21	採石遺構Ⅳ③	上	19号石材 (南から)	図版43	出土遺物②	鉄滓	
		下	19号石材周辺 (東から)	図版44	出土遺物③	鞆羽口・立壁片・鉄片・木炭	
図版22	採石遺構Ⅳ④	上	20・21・22号石材 (北から)				
		下	20・21・22号石材 (南から)				

挿 図 目 次

第1図	昭和44年の大坂城石垣刻印調査風景…………… v	第19図	岩ヶ平刻印群第10次調査検出採石土坑2……………28
第2図	芦屋市の位置……………vii	第20図	呉川遺跡出土刻印石……………32
I. 序説			
第3図	豊臣大坂城本丸石垣の発見状況…………… 2		
第4図	奥山刻印群発見の端緒をなした刻印石 (C地区No.1)…………… 3		
第5図	徳川大坂城東六甲採石場における 刻印群の分布と調査地点(1/50000)…………… 4	第21図	海清寺南天棒石碑の赤穂藩池田家刻印……………33
第6図	現代彫刻の一つとして保存された 呉川遺跡出土刻印石…………… 6	第22図	宮川川床に遺存する調整石郡……………33
第7図	「伊木三三郎」刻印石(岩ヶ平No.35)…………… 7	第23図	岩ヶ平刻印群刻印石分布図(1/7500)……………34
II. 調査の発端と経緯について			
第8図	六麓荘高区配水池工事計画図(1/1250)…………… 9	第24図	岩ヶ平刻印群の刻印石(1)……………39
第9図	調査地点位置図(1/4000)……………10		①岩ヶ平No.5
III. 地理的・歴史的環境と市域北東部の埋蔵文化財			
第10図	六甲山地東南麓地域の地質概要図(1/50000)……………12		②岩ヶ平No.4
第11図	八十塚古墳群と六麓荘台地周辺の遺跡(1/5000)……………15		③岩ヶ平No.23(出雲松江藩堀尾家)
IV. 徳川幕府による大坂城再築と東六甲採石場			
第12図	現存大坂城の石垣と刻印……………21		④岩ヶ平No.66
	①南内濠内壁(南西から)		⑤岩ヶ平No.30
	②南内濠内壁毛利家丁場近景		⑥岩ヶ平No.40
	③東外濠内壁の現状(南から)		⑦岩ヶ平No.78(長州藩毛利家)
	④西外濠乾槽付近		⑧岩ヶ平No.29
	⑤東外濠福井藩松平家刻印	第25図	岩ヶ平刻印群刻印石拓影(1)(1/8)……………40
	⑥山里丸刻印石公園「あしや」刻印石	第26図	岩ヶ平刻印群の刻印石(2)……………41
	⑦東外濠唐津藩寺澤家刻印		①岩ヶ平No.36(因伯鳥取藩池田家)
	⑧山里丸刻印石公園唐津藩寺澤家刻印		②岩ヶ平No.65(因伯鳥取藩池田家)
第13図	大坂城東外濠石垣(小浜藩・宮津藩京極家丁場)……………22		③岩ヶ平No.70(因伯鳥取藩池田家)
第14図	徳川大坂城外郭関連石垣検出 唐津藩寺澤家刻印拓影……………22		④岩ヶ平No.34(因伯鳥取藩池田家)
第15図	甲山刻印群・越木岩刻印群 ・城山刻印群の刻印石……………24		⑤岩ヶ平No.39(因伯鳥取藩池田家)
	①甲山刻印群A地区		⑥岩ヶ平No.56(因伯鳥取藩池田家)
	②甲山刻印群C地区(肥前平戸藩松浦家)		⑦岩ヶ平No.68(因伯鳥取藩池田家)
	③甲山刻印群B地区		⑧岩ヶ平No.47(因伯鳥取藩池田家)
	④越木岩刻印群(備中松山藩池田家)	第27図	岩ヶ平刻印群刻印石拓影(2)(1/8)……………42
	⑤城山刻印群A地区No.3(日向佐土原藩島津家)	第28図	岩ヶ平刻印群の刻印石(3)……………43
	⑥城山刻印群D地区No.1~4(豊後臼杵藩稲葉家)		①岩ヶ平No.18(若狭小浜藩京極家)
	⑦城山刻印群F地区No.2~4		②岩ヶ平No.17
	⑧城山刻印群F地区No.6		③岩ヶ平No.14(若狭小浜藩京極家)
第16図	奥山刻印群の刻印石および巨大な割石 (いずれも福井藩松平家)……………25		④岩ヶ平No.16(若狭小浜藩京極家)
	①奥山刻印群A地区No.1		⑤岩ヶ平No.38(若狭小浜藩京極家)
	②奥山刻印群B地区No.24・25・35		⑥岩ヶ平No.69(若狭小浜藩京極家)
	③奥山刻印群B地区No.4		⑦岩ヶ平No.63(若狭小浜藩京極家)
	④奥山刻印群B地区No.22・26他		⑧岩ヶ平No.19(小浜藩京極家・鳥取藩池田家)
	⑤奥山刻印群B地区No.19	第29図	岩ヶ平刻印群刻印石拓影(3)(1/8)……………44
	⑥奥山刻印群C地区No.5	第30図	岩ヶ平刻印群の刻印石(4)……………45
	⑦奥山刻印群B地区通称五枚岩		①岩ヶ平No.54(若狭小浜藩京極家)
	⑧奥山刻印群B地区五枚岩の矢穴痕		②岩ヶ平No.58(若狭小浜藩京極家)
第17図	八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳 北東トレンチ検出の割石と採掘坑……………27		③岩ヶ平No.53(若狭小浜藩京極家)
第18図	岩ヶ平刻印群第10次調査検出採石土坑1……………28		④岩ヶ平No.13(若狭小浜藩京極家)
			⑤岩ヶ平No.45
			⑥岩ヶ平No.51
			⑦岩ヶ平No.24(若狭小浜藩京極家)
			⑧岩ヶ平No.8
V. 調査成果			
第31図	芦屋市六麓荘浄水場現況図(1/1500)……………47		
第32図	調査地全体方眼地区割図(1/500)……………48		
第33図	調査風景……………50		
第34図	調査風景……………50		
第35図	地形測量図(1/300)……………53・54		
第36図	検出遺構全体図(1/300)……………55・56		
第37図	調査区南半部遺構検出状況図(1/125)……………57・58		

第38図	第2・3トレンチ土層断面図 (1/100) ……………	60
第39図	採石遺構Ⅰ 平面実測図 (1/80) ……………	64
第40図	採石遺構Ⅰ 断面実測図 (1/80) ……………	65
第41図	6号石材 (岩ヶ平No.73) 刻印拓影 (1/5) ……………	67
第42図	採石遺構Ⅰ 7号石材実測図 (1/40) ……………	69
第43図	7号石材截断状況模式図 ……………	70
第44図	採石遺構Ⅰ 6・8・9・12・13号石材実測図 (1/40) ……………	71
第45図	9号石材截断状況模式図 ……………	72
第46図	採石遺構Ⅱ 14号石材平面断面実測図 (1/40) ……………	74
第47図	採石遺構Ⅱ・Ⅴ 平面断面実測図 (1/80) ……………	75
第48図	14号石材截断工程模式図 ……………	76
第49図	採石遺構Ⅱ 15号石材平面断面実測図 (1/40) ……………	77
第50図	15～17号石材截断工程模式図 ……………	78
第51図	採石遺構Ⅲ 18号石材截断状況模式図 ……………	78
第52図	採石遺構Ⅲ 平面断面実測図 (1/40) ……………	79
第53図	採石遺構Ⅳ 平面・断面実測図 (1/80) ……………	81
第54図	採石遺構Ⅳ 備前摺鉢出土状況図 (1/20) ……………	84
第55図	建物遺構・鍛冶炉跡周辺実測図 (1/100) ……………	89
第56図	建物遺構実測図 (1/80) ……………	90
第57図	鍛冶炉跡1・2 検出状況実測図 (1/40) ……………	92
第58図	鍛冶炉跡1 実測図 (1/20) ……………	93
第59図	鍛冶炉跡2 実測図 (1/20) ……………	94
第60図	鍛冶炉断面概念模式図 ……………	95
第61図	鍛冶炉及び覆屋推定図 ……………	95
第62図	土器・陶磁器類及び鉄片実測図 (1/3, 1/2) ……………	96
第63図	出土絵銭拓影 (1/1) ……………	98
第64図	鉄滓実測図 (1/3) ……………	99
第65図	鞆羽口実測図 (1/3) ……………	101
第66図	炉壁・立壁実測図 (1/3) ……………	102

Ⅵ. 自然科学的分析調査の結果

第67図	鉄滓の長軸長と厚さの相関関係 ……………	104
第68図	腕形鍛冶滓 (KIN - 1) の顕微鏡組織 ……………	121
第69図	腕形鍛冶滓 (KIN - 2) の顕微鏡組織 ……………	122
第70図	疑似粒状滓 (KIN - 3-1・2) の顕微鏡組織 ……………	123
第71図	疑似粒状滓 (KIN - 3-3・4・6) の顕微鏡組織 ……………	124
第72図	鍛造剥片 (KIN - 4-1・2・3) の顕微鏡組織 ……………	125
第73図	鍛造剥片 (KIN - 4-4・5・6) の顕微鏡組織 ……………	126
第74図	鍛冶滓 (KIN - 2) 中铁塊炭素量と 断面硬度値の関係 ……………	127

第75図	腕形鍛冶滓中の落下鉄塊のマクロ組織 ……………	128
第76図	腕形鍛冶滓 (KIN - 1) 中の鉄滓と 鉄中非金属介在物のE P M A調査結果 ……………	129
第77図	花崗岩類の分類法 ……………	130
第78図	六甲山系の地質図 ……………	131
第79図	節理に沿った風化とバッドランドの形成 ……………	133
第80図	六甲山地東部における六甲花崗岩の節理間隔 ……………	134
第81図	芦屋市とその周辺の地形分類図 ……………	137
第82図	六甲山地南東部から調査地を経て 低地に至る地形断面の模式図 ……………	137
第83図	調査地南部の堆積層柱状断面図 ……………	139
第84図	堆積層Dに含まれる礫の長軸方向と軸長の変化 ……………	140

Ⅶ. 考察

第85図	岩ヶ平刻印群北部における刻印石分布と 各藩の推定採石領域 (1/4000) ……………	145
第86図	岩ヶ平刻印群北部における刻印石拓影 (1/8) ……………	146
第87図	六麓荘浄水場北方山林中の刻印石 ⁽¹⁾ ……………	147
	①岩ヶ平No.42 (若狭小浜藩京極家)	
	②岩ヶ平No.43 (若狭小浜藩京極家?)	
	③岩ヶ平No.71 (若狭小浜藩京極家)	
	④岩ヶ平No.21 (肥後熊本藩加藤家)	
	⑤岩ヶ平No.20 (肥前唐津藩寺澤家)	
	⑥岩ヶ平No.49 (肥前唐津藩寺澤家)	
	⑦岩ヶ平No.72 (肥前唐津藩寺澤家)	
	⑧岩ヶ平No.73 (肥前唐津藩寺澤家)	
第88図	六麓荘浄水場北方山林中の刻印石 ⁽²⁾ ……………	148
	①岩ヶ平No.74	
	②岩ヶ平No.75	
	③岩ヶ平No.76 (出雲松江藩堀尾家)	
	④岩ヶ平No.77 (長州藩毛利家)	
第89図	六麓荘浄水場北方山林中の採石遺構 ……………	149
第90図	中・近世鍛冶遺構の類例 ……………	151
第91図	作業工程模式図 ……………	152
第92図	V期備前摺鉢の類例 ……………	155
第93図	絵銭 (駒曳銭) の出土例 ……………	159
第94図	古墳時代終末期段階に築造された城山18号墳 ……………	160
第95図	藤ヶ谷遺跡火葬墓 (古墓) ……………	161
第96図	芦屋市・西宮市出土の終末期古墳 副葬須恵器杯集成 (1/4) ……………	162

表 目 次

表1	大坂城再築石垣工事担当大名一覧 ……………	18
表2	徳川大坂城東六甲採石場において 刻印から採石が確認される大名一覧 ……………	26
表3	岩ヶ平刻印群における採石大名と主要刻印 ……………	31
表4	岩ヶ平刻印群刻印石一覧 ……………	35
表5	芦屋市教育委員会による岩ヶ平刻印群 現状・確認・立会・発掘調査一覧 ……………	38
表6	主要出土鉄器一覧 ……………	104
表7	主要出土鉄滓一覧 ……………	105
表8	鍛冶炉跡1炭溜り①層 鍛造剥片集計表 ……………	108
表9	鍛冶炉跡1炭溜り②層 鍛造剥片集計表 ……………	108
表10	鍛冶炉跡1炭溜り③層 鍛造剥片集計表 ……………	108
表11	鍛冶炉跡1炭溜り④層 鍛造剥片集計表 ……………	108
表12	鍛冶炉跡1炭溜り①～④層 鍛造剥片集計表 ……………	108
表13	鍛冶炉跡1炭溜り①層 粒状滓観察表 ……………	108
表14	鍛冶炉跡1炭溜り②層 粒状滓観察表 ……………	108
表15	鍛冶炉跡1炭溜り④層 粒状滓観察表 ……………	108
表16	供試材の履歴と調査項目 ……………	112
表17	供試材 (鉄滓) の組成 ……………	115
表18-1	疑似粒状滓の調査結果 ……………	118
表18-2	鍛造剥片の調査結果 ……………	118
表19	出土遺物の調査結果のまとめ ……………	119

I. 序 説

文化財の調査・研究および保護の対象は、建造物・絵画・彫刻・工芸品・書籍・典籍・古文書・民俗芸能・風俗習慣や古墳・遺跡などの埋蔵文化財と多岐にわたり、幅広い。

本市の文化財保護行政は、阪神地方では他市に先駆け早くから着手しており、昭和25年頃より市史編纂事業を通して、新資・史料の掘り起こしとその保護に努めてきた。昭和40年代以降は、これらに文学・絵画を加えて、その保護活動の拠点づくりにも意を注ぎ、当面は文化財所管課が谷崎潤一郎記念館・美術博物館の文化ゾーンの建設準備作業や富田碎花旧居の保存・公開、文学資料の整理研究などとも深く関わってきた。これらは今日、文化振興財団による運営など、所管を離れた動きとなって発展し、現在に至っている。

埋蔵文化財については、近隣市町の状況と比較して遺跡分布の密度が極めて濃密であることが大きな特色としてあげられる。その一つの要因として、芦屋地域が古代の段階に白鳳寺院・驛・郡衙（推定地）の3者が集中して緊結的な存在を示していることがあげられる。言うなれば、葦屋郷・賀美郷の概ね二郷の郷域をもつ狭い芦屋地域が、かつては古代摂津国菟原郡の中核地であったということであり、主要幹線である古代山陽道の通過拠点としての官衙ブロック（政治的中心地）の形成と無関係ではない。そうした特徴は、遺跡個々の複合度がきわめて高いこと、新旧各時代にわたって中心的遺跡として揃い、時間的にも互いに連鎖し、その時代時代を代表するタイプサイトとして地域の標式となっている点にも如実に表われていよう。

本書でこれから報告する徳川大坂城東六甲採石場も、まさに芦屋地域ならではの個性豊かな特色を示す遺跡類型の一つであり、江戸時代にあっては他地域に取って替わる遺跡のない稀少価値をもつ存在となっている。

徳川大坂城東六甲採石場の調査・研究は、その発見から今日に至るまで実に多くの人々が係わり、数10年の長い歴史を有している。本章では、それらの発展段階をいくつかの画期により区分し、今回の発掘調査に至るまでの調査・研究の流れをみておきたい。また、大坂城における調査・研究の進展についても関連する経緯があり、ごく簡単にふれておきたい。

大坂城総合学術調査の成果と意義

大坂城の調査・研究において、西外堀の水枯れを契機として実施された昭和34年（1959）の総合調査は、特筆に値する成果を収めている。芦屋市域での研究史の概観に先立ち、まずこの調査の経緯・経過と諸成果についてふれ、とくに刻印石研究と大坂城築城主体の歴史的推移に関して重要とみられる点を整理しておく。

この調査は、大阪市・文化財保護委員会・読売新聞社三者の共同事業として「大坂城総合学術調査団」を組織して進められたものであり、歴史学関係者、建築史関係者、地質学関係者の



第3図 豊臣大坂城本丸石垣の発見状況
〔大阪市文協編 1985〕から

混成で、調査団長村田治郎を筆頭に末永雅雄・坂本太郎・桑田忠親・山根徳太郎・浅野清・村山朔郎・棚橋諒・村川行弘などの錚錚たる顔ぶれであった。

豊臣秀吉の金明水井戸調査、西外堀の堀底調査に加え、ボーリング調査並びにサウンディング調査の地盤調査が行われ、本丸天守台南で9.35mの深部に石垣遺構が確認され、発掘の結果、このような深部に野面積みの石垣が検出されたのである。豊臣秀吉創建の大坂城は地中深くに埋もれていることが証され

た衝撃的な調査結果であり、読売新聞誌上の発掘報道には多くの人々がわが目を疑った。これを裏づけるかのように石垣刻印調査では、現存石垣表面に残る刻印が集中的に調査されたが、関ヶ原の合戦で滅亡した多くの大名の刻印は全く存在せず、元和・寛永年間の徳川築城大坂城の関係大名の刻印に偏在する重要な事実が確かめられた〔内田 2000〕。

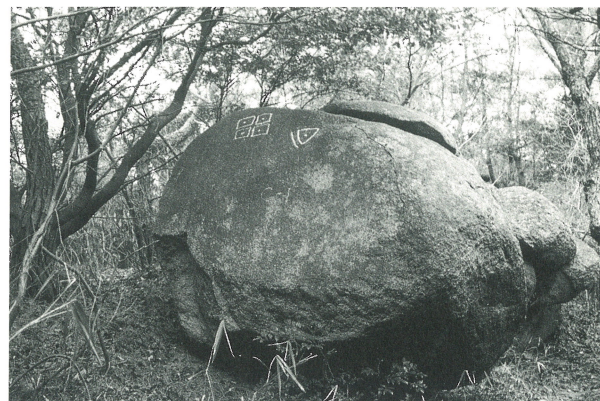
いまこの成果の正報告書は公表されていないが、〔村川 1970・2002〕や〔村山 1984〕はそれに替わるものとして今日有用である。同じ頃出版された2冊の書〔岡本 1970、桜井 1970〕も有弁に語り、その成果を取り入れたり、大坂城の歴史的史料を掘り起したものとして貴重である。内田は〔小野 1899〕を大坂城が「元和6年から寛永6年まで前後10年かけて徳川氏の下で徹底した修築が行なわれたことを明らかにしていた」最初の公けの書として高く評価し、当時の調査成果とリンクする結果となったとしている〔内田 2000〕。

その後、大阪城天守閣ではボーリング手法によって地下の石垣遺構の存在状況を究明し、昭和48年(1973)～56年(1981)までの前後9年に及ぶ調査を実施した。結果は現本丸地下に豊臣秀吉大坂城本丸石垣の残存する事実が確かめられ〔大阪城天守閣編 1984〕、昭和59年(1984)の本丸詰の丸石垣の発見〔大阪市文協編 1985〕、昭和63年(1988)の天守台石垣検出〔渡辺・内田・北川 1989〕へと成果は続く(第3図)。三の丸比定の問題や論争、惣構の実態究明などについては紙幅の関係もあり、本章では割愛するが、豊臣大坂城の諸研究が発掘調査成果を踏まえて活発化するのに比べて、徳川再建大坂城の研究は専ら工事関係史料として有用な渋谷文書と京極文書がクローズアップされるようになった。内田九州男が紹介している〔脇田 1979〕や〔内田 1980〕は興味深い視点と結論が開陳されているし、大坂城の研究全体をまとめた『大坂城の諸研究』〔岡本編 1982〕も、20年前の書物ではあるものの、刻印石の単独研究も盛り込まれたものであり〔藤井 1982〕、今後の研究の土台となるものである。

第1期 刻印石の発見と分布調査の時期

昭和43年(1968)11月10日、芦の芽グループ会員小倉幸一氏(当時、兵庫県立芦屋高等学校生徒)による六甲山中、野外活動センター内での刻印石の発見を受け、村川行弘氏や藤川祐作氏を

中心とする芦の芽グループが精力的に分布調査を実施した段階である。調査は、翌昭和44年2月以降に本格化し、芦屋市の城山をはじめ、西宮市の目神山や北山公園でも刻印石の発見が相つぎ、広範な地域での採石場の認識へとつながっていった。このあたりの経過は、〔藤川 1972〕〔村川 1962・70, 2002〕〔古川 1993〕に詳しい（第4図）。



第4図 奥山刻印群発見の端緒をなした刻印石（C地区No.1）

刻印石の発見地域が著しく拡大した結果、昭和40年代には刻印石の分布状況を有意に

とらえた六つの「刻印群」の設定がなされ、奥山刻印群を筆頭として、城山刻印群・岩ヶ平刻印群・越木岩刻印群・北山刻印群・甲山刻印群などがその範囲や組成の検討とともに設けられた（第5図）。このうち岩ヶ平刻印群については、詳細な分析と研究が加えられて兵庫県埋蔵文化財調査集報などに掲載され〔森岡・古川他編 1979, 藤川 1979〕、周知の幅をその時点で県下全体に広げることとなった。

徳川大坂城関連の採石場の分布調査は、この間も芦の芽グループを中心に地道に続けられ、奥山刻印群では細別地区の増加、一部は市街地へとそのつながりがのびていった。岩ヶ平刻印群は今回の調査地を含むもので、本書では詳細な考察が加えられているが、昭和60年段階で確認された刻印石は25個にのぼった〔古川 1993〕。その後、越木岩・北山・甲山の3刻印群についても西宮市教育委員会の管下において分布調査や保護の手が差しのべられるようになった〔藤川 1982・85a・90, 西宮市教委編 1982〕。

第2期 遺跡分布地図への石材所在地登載と保護活動開始の時期

昭和54年(1979)、芦屋市教育委員会はこれまでの民間調査の蓄積を高く評価し、採石場について埋蔵文化財の一環としての認識を強めるとともに、国庫補助事業として計画中の遺跡詳細分布調査にもこれらを調査対象に組み入れることとした。昭和54年度にはその（第1分冊）として発行計画があった埋蔵文化財包蔵地分布地図にその現況の掲載が予定され、調査対象地区として他の埋蔵文化財と並行して城山地区と奥山地区の詳細分布調査が実施された。その成果は、部内資料でもある埋蔵文化財包蔵地台帳へも登載され、その後、遺跡分布地図として公開をみた〔森岡編 1980〕。ドットを示すという点では、地下に埋もれている一般的な埋蔵文化財とほぼ同等の埋蔵文化財としての認識が初めて得られたわけであり、この時点で、ようやく刻印石や矢穴石、割石など関係する石材が概ね遺跡保護の扱いを受けるようになった。ただし、この時期における事前調査は、専ら事業地の分布調査が中心であり、発掘を伴った確認調査による包蔵状況の把握が行われるには至っていない。その間、多くの刻印石が土木工事によって失われていったものと思われる。

しかし、埋蔵文化財包蔵地分布地図に刻印石・矢穴石・割石などが分布する近世採石場の範



第5図 徳川大坂城東六甲採石場における刻印群の分布と調査地点 (1/50,000)

図が登載されたことによって、開発協議に際しても地表面に存在する刻印石などは位置の確認と事業地における取り扱いなど、事前や事後の保存協議が行われるようになり、文化財保護上、格段の前進がみられたのである。おそらく全国で初めての方針転換であったと思われる。

第3期 分布地図の刷新と市街地における刻印石追認の時期

埋蔵文化財包蔵地分布地図は、その性格上、更新を原則とするものである。10年後に発刊された昭和63年度改定の分布地図では、市内全域で関連石材が改めて精査され、所在地点と刻印

群としての推定範囲がマークされた〔森岡編 1988〕。一石一石の所在が市域全体で概ね把握されたわけである。

これらの調査は、市教育委員会による行政的な分布調査とは別個に、芦の芽グループからの基本データの提供や古川久雄氏による全面的な協力を得て進められ、5年後にさらに刷新している〔森岡・和田・白谷編 1993〕。ただし、六麓荘町などでは民地（主として庭など）にその大半が遺存する採石関連石材を悉皆調査することは至難であり、所在の確定に未知数を残すことは否めない。本来遺存する石材の実数は今日でも不明と言わざるを得ない。

この段階では、市街地の一部民家や公共施設の敷地内にある刻印石をも地図上にドットされ、昭和60年代以降の開発行為は、ほぼ建築確認申請をも射程に入れてキメの細かな審査・指導がなされ、さらに一般の埋蔵文化財と同様、全庁的な取り扱いに関する庁内合議体制の道も開かれた。遺跡範囲については、個別の確認地点を尊重しつつも、踏査実績を母体として推定範囲を設けていく方針をとり、その結果、未踏査地域でも多くの開発指導ができるようになった。そして、先には不時発見も続出する契機をなした。

昭和63年から平成4年頃にかけては、六麓荘町内における住宅新築や建替えに伴う事前確認調査で、新たに刻印石の発見される例が増加し（第2～5次調査）、一部については、実績報告として概要がまとめられている〔森岡・古川 1989, 和田 1993a・1993b〕。

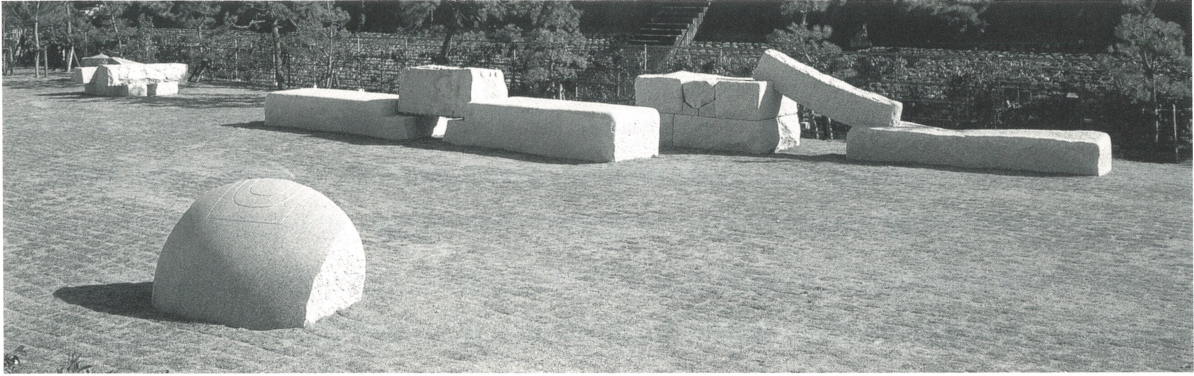
第4期 発掘調査に伴う採石遺構確認の時期

昭和50～60年代、市内山麓部において城山・三条古墳群、八十塚古墳群など古墳時代後期の群集墳の事前調査が進む過程において〔森岡他 1983, 森岡編 1986〕、調査区内より採石に関連した遺構が見い出されるようになった。自然石から直方体の調整石を割り取ったときに出る端石や採掘坑・作業ピットが偶発的に検出された、八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳〔森岡・和田・古川他 1990〕の例は、表面調査ではなく、具体的な遺構を発掘調査の過程の中で初めて確認したものとして特筆すべきものであり〔森岡・古川 1998, 森岡 2002〕、以後、採石場であっても土中の石材や採掘坑を予想せざるを得ない状況となった。

昭和54年度からは、国庫補助事業による市内遺跡の発掘調査が始まったが、14年後の平成5年度、六麓荘町94番地における古墳推定地の住宅開発に伴う事前調査において、確認トレンチの中で古墳推定地点（横穴式石室）の石材の性格精査中に、採石土坑と矢穴石の存在を初めて確認。土中深くにも採石遺構が存在する事実を発掘調査現場において目の当たりにした〔森岡・白谷他 1994〕。この段階では、古墳の調査に付随してようやく採石場の調査も補助金事業の対象としてベースに乗せることが可能となった点を強調しておきたい。

第5期 採石場の事前発掘調査の開始と呉川遺跡発見の時期

平成5年9～10月、芦屋市教育委員会は芦屋市墓園拡張工事に伴う事前調査を実施した。芦の芽グループに委託した分布調査を受けての発掘調査であったが、大規模調査についてはなお開発部局の理解が得られず、調査範囲は限定的なものとならざるを得なかった。しかし、この段階で初めて採石遺構や刻印石・矢穴石のみを対象とする記録保存と、石材の移築保存を前



第6図 現代彫刻の一つとして保存された呉川遺跡出土刻印石

提とした発掘調査を行うことが可能となり、採石場全体の様相を少しでも加味した歴史的価値をひき出す報告書を作ることができた〔森岡・古川 1998〕。この中で毛利氏所用刻印とその用石分布の範囲が再踏査され、すべての拓本資料が精力的に作られるとともに詳細に研究された〔古川 1998〕。

一方では、昭和63年(1988)、海浜部において石材の積み出し場と推測される呉川遺跡が発見され〔藤川 1991〕、山間部や山麓部の採石場と呼応する新たな遺跡の形態と意義が注目されるようになった〔森岡・古川 1992〕。芦屋市の4号幹線改修工事に伴い呉川町63番地から一括出土した9個の石材で、内6個に合計9刻印が判明し、現在は芦屋市立美術博物館前庭にて現代彫刻の一環、モニュメントとして展示保存されている〔芦屋市立美術博物館編 1991a・b・c〕(第6図)。これらは、各大名の所用刻印の分析から、岩ヶ平刻印群と奥山刻印群の一部が関与していること、この両刻印群から搬出し、呉川遺跡がその中継地となって大坂城に海路で運搬されたことなどが明らかにされている〔森岡・古川 1992〕。

その後、平成4年になって都市計画道路中央道敷設工事に伴って呉川遺跡から再び刻印石の一群が一括出土し〔森岡 1993b・94b〕、その存在意義はさらに高まるとともに、道路工事の事前調査として初めて呉川遺跡の様相の一端が明らかにされた〔村尾 1994, 東 1994〕。採石場と有機的な関係を有する石材積出場の内容が判明し始めたことは、全国的にみても類例の少ない遺跡の存在形態として、今後重視すべきものである。また、大坂城と芦屋、二者を結ぶ大阪湾の意義がにわかにクローズアップされた〔森岡・田口 1991〕。

第6期 開発に伴う発掘調査が軌道に乗り始めた時期

平成8年以降、ついに国庫補助事業として採石場の事前調査が実施されるようになった。芦屋市における特色ある生産遺跡として、これら採石場の存在の歴史的意義が認められるようになったわけであり、記録保存が多いとはいえ、文化財としての関係石材保存の水準はすこぶる高まった〔森岡・古川 2002a〕。個人住宅の建設を契機とする調査が圧倒的に多いけれど〔森岡・白谷 1992、森岡・古川 1989、和田 1993a・b、森岡・和田・白谷編 1993、竹村 1998a・b、竹村 2000〕、それまで予想さえしなかった人名刻印「伊木三十郎」のたて続けの検出〔古川 1992, 大國 1992〕(第7図)、採石領域の想定に一定の秩序を与える刻印分布の検証が、着実に

実を結びつつあることを指摘できる〔森岡・古川 2002a・b、古川編 1999〕。

また平成11年11月に行われた、芦屋大学サブグラウンド建設に伴う発掘調査（第10次調査）では、新たに6個もの刻印石が発見されただけでなく、明瞭な石材採掘坑を二カ所検出した。これは、大半が地中にうまった巨石を掘り出し複数の調整石を割り採っていく工程が、きわめて生々しく残る遺構



第7図 伊木三十郎刻印石（岩ヶ平No.35）

であり、花崗岩の採石場を発掘調査すればこのような採石遺構が検出されるという、典型的な例を示すこととなった〔竹村・古川 1999〕（第18・19図）。

一方において、埋蔵文化財全般の価値基準や保護基準の平準化が国・県により検討され、調査対象についても中世末期までを射程に入れることを原則とした方向性とマニュアルが出されており〔兵庫県教育委員会 2000〕、採石場の調査についても、一定の基準を考えるべき時期に直面している。一つ一つの資料が花崗岩の巨石ということもあって、遺物的な取り扱いもままならず、すべてを保存することもできない相談である。何を残し、何が残せないかの選択の明確な基準づくりも、急務の課題と考える。芦屋市は阪神・淡路大震災以降、数多くの復興調査を立ち上げ、こなしてきており〔芦屋市教委編 1997、森岡・竹村 2000、森岡・荒木 2001〕、こうした一連の調査とのかみ合わせも十二分に配慮していくべきであろう。

調査成果は、しばしば『広報あしや』（市域全戸配付）に紹介され〔芦屋市広報課編 2000, 2002a・b・c〕、広く市民に理解される素地も育まれつつある。芦屋と大坂城との関係の深さも市民層に少しずつ知られてきたように思われる。課題も多いけれど、目的をはっきりと持った発掘調査を通じて、大坂城石垣採石場の保存と活用が確かに模索され始めている。

（森岡秀人）

Ⅱ．調査の発端と経緯について

近年、発掘調査例が増加しつつある岩ヶ平刻印群において、第12次目に該当する今回の発掘調査は、芦屋市の水道施設新築に伴って実施されたものである。

芦屋市水道部工務課から、芦屋市六麓荘町5番地・5番地1・剣谷3番1に位置する六麓荘浄水場における水道施設（高区配水池）築造工事についての計画が打診されたのは、平成12年度の末であった。その後、平成13年度に入って事業計画の進捗があり、平成13年5月30日、教育委員会文化財課に山岸課長補佐、木島係員が来室され、その取り扱いについて協議した。事業予定地と包蔵地との関係、予想される文化財など、係長森岡の方から遺跡分布地図に基づいて具体的に説明を行った。同年6月6日には、同課からより具体的な事業計画があがってきたため、事前調査に備えて通知書・調査依頼方式と発掘調査費の財源確保の指導と助言を行った。

本工事計画は、六麓荘浄水場内の取水口付近の地盤（FL=225.0m）に六麓荘高区配水池を建設するものであり、現在供用されている角池貯水池（昭和7年築造、8,000 m^3 ）を取り壊し、南面する石積も除去して盛土工事を行い、幅約5mの進入路並びに代替水路を建造する予定が盛り込まれている。新設される配水池は貯水量600 m^3 を測る規模で、これに伴う付近一帯の造成面積は1,500 m^2 を前後する（第8図）。工事内容は、盛土と切土の造成、道路の設置、配水池の造成・築造、配管（送水管・配水管）、水路工とから成り、広範囲であるため、埋蔵文化財として20年来周知されている徳川大坂城東六甲採石場の岩ヶ平刻印群に対する影響はかなり大きなものになることが予測された。

芦屋市水道部は、以上の工事計画が確定した時点で、芦屋市教育委員会経由で兵庫県教育長宛、埋蔵文化財発掘通知書（芦水第135号の3、平成13年6月8日付）を提出、文化財保護法第57条の3第1項による所定の手続きを行った（芦教文第305号、平成13年12月19日に県教育委員会に進達）。

これを受けて芦屋市教育委員会では、6月28日に行った事業地現地の下見を経て、文化財保護の観点から事業地の詳細分布調査と包蔵地の確認調査が必要と判断し、平成13年8月24日には予備調査を実施した。この予備調査にあたっては、この方面の研究を長年継続している古川久雄氏を混え、7月12日・27日、8月15日に実施に際しての細部打ち合わせを行い、調査所見に関してもより具体的なものが出るよう調査の協力を求めた。その結果、徳川大坂城関連の矢穴石・石材加工痕跡・遺構などのほぼ全域での所見が得られたため、平成13年9月上旬、調査結果の概略を市水道部工務課に報告した。報告の内容に関しては、結果の要点をまとめた概要書を作成しているが（「芦屋市六麓荘町 六麓荘高区配水池建設予定地埋蔵文化財現状確認調査の概要」2001年9月文書）、標高219～232mの緩傾斜する平坦地が事前調査の主たる対象と

なること、その部分の北端部と南東部にやや高みがあって南東部には石塊群が遺存すること、西側急斜面部一帯には巨石の露頭が見られ、事業地にはかなり多くの六甲花崗岩の石塊が埋没しているようすが明らかになるとともに、矢穴を伴う割石が散見される所見を述べている。これについては、分布調査の正式結果報告として、芦屋市教育長三浦清から兵庫県教育長宛、芦教文第304号（平成13年12月19日付）にて送付、遺構（有）、遺物（無）、取扱い（本発掘調査実施）、遺跡分布地図の追補訂正の要否（否）で各項目回答を果たしている。

その後、市水道部は当該地の文化財保護の観点からの情勢判断がついたとして、発掘調査の正式依頼を芦屋市教育委員会文化財課に行ったので、調査に関する具体的な調整段階に入った。調整および協議は、調査方法・調査機関や調査体制など多岐にわたるが、詳細については方式確定の件でかなり遅延し、平成13年11月4日の協議でほぼアウトラインが決まり、その後、具体化についてなお協議を経ることになった。そして、諸般の事情をクリアーして、平成14年1月10日に芦屋市教育委員会が調査主体となり、森岡秀人・古川久雄両名が発掘担当者となって今次の発掘調査を開始した。（森岡）



第9図 調査地点位置図 (1/4000)

Ⅲ. 地理的・歴史的環境と 市域北東部の埋蔵文化財

1. 地理的・地質的環境

徳川大坂城東六甲採石場は、六甲山系南東麓の神戸市東灘区から西宮市にかけての広大な範囲に広がる、徳川幕府による大坂城再築に伴う採石場の総称である。そのうち芦屋・西宮市域では、芦屋川などの主要河川や小河川・各尾根によって西から城山刻印群・奥山刻印群・岩ヶ平刻印群・越木岩刻印群・北山刻印群・甲山刻印群などに大きく分けられる。神戸市域では、住吉川・石屋川流域で点々と採石痕跡を見出すことができるものの、まとまった群としての認識にはいたっていない。

今回、調査した岩ヶ平刻印群は、六麓荘・岩ヶ平地上の標高60～200mの緩斜面を中心として、その北方山中を含めた範囲を占める。

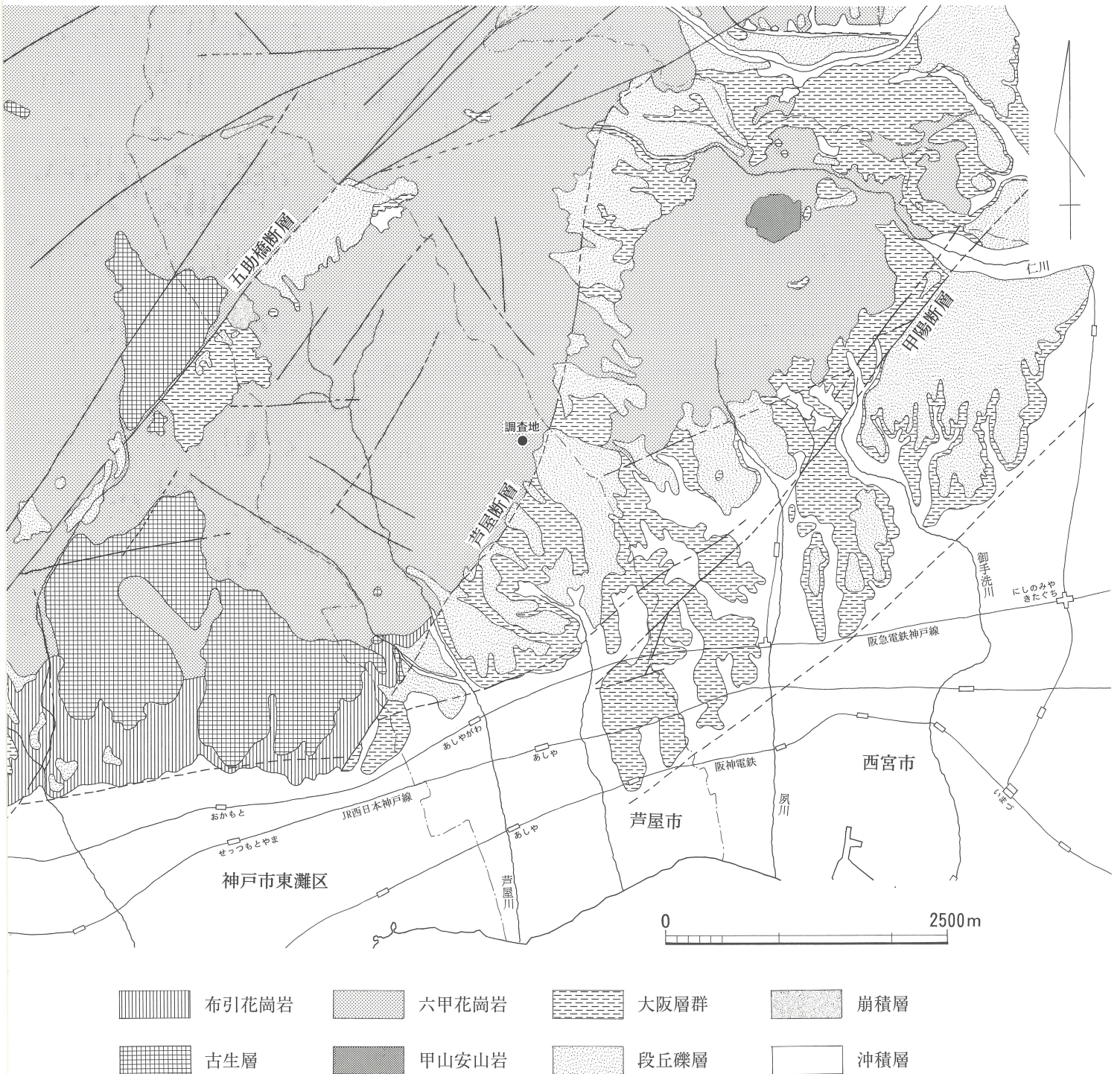
徳川大坂城東六甲採石場が所在する六甲山地南東側は、基盤岩の大半が六甲花崗岩で構成されている。ただし、芦屋川以西の東お多福山・金鳥山付近では古生層が島状に存在しているのと、山麓部には細長く布引花崗閃緑岩が分布している。そして、この基盤岩で構成された六甲山南東側地域を五助橋断層・芦屋断層・甲陽断層・伊丹断層などの逆断層が北東から南西方向へほぼ並行して走り、これら逆断層によって、六甲山南東側は階段状に分断された地形を形づくっている。また、芦屋断層以北は一部を除いて基盤岩である六甲花崗岩がほぼ露出しており、逆に甲陽断層以南は基盤岩が地下深くもぐり込んで、大阪層群や段丘礫層で構成された洪積台地と沖積平野が広がっている（第10図）。

特に岩ヶ平刻印群が存在する芦屋断層の南東縁は、大阪層群の上を土石流堆積物の礫層が被覆する台地や緩斜面地が連なっており、六麓荘・岩ヶ平台地もそのうちの一つである。

この台地や緩斜面地は、基盤岩である六甲花崗岩が露出していないにもかかわらず、上方の基盤露頭より崩壊流失した巨礫を含む土石流堆積物が厚く堆積しているので、採石に適した地表面に無数の花崗岩塊がみられるのが特徴である。

この六甲花崗岩の巨礫群は、大坂城関連の採石以外に、六麓荘・岩ヶ平台地に展開する八十塚古墳群の横穴式石室の天井石や石室壁体の構築石に利用され、また近世末から明治頃の採石も盛んに行われ、その痕跡も各所にみることができる。現在でも空閑地や邸宅内、さらに道路沿いの石垣にも大きな自然石があり、新旧の矢穴痕跡の顕著なものも多数見うけられる。

（濱野俊一）



第10図 六甲山地東南麓地域の地質概要図 (1/50000)

2. 歴史的環境と周辺の遺跡

芦屋市域北東部に位置する岩ヶ平刻印群周辺は、調査の進んだ現時点においても、遺跡の密集する芦屋川右岸地域と比較して全体的に遺跡の存在が稀薄な地域である。朝日ヶ丘遺跡と八十塚古墳群を代表として、その他には、実態がはっきりせず遺物が散布する遺跡が数地点（岩

園天神社東遺跡・岩園天神社西遺跡・朝日ヶ丘北遺跡・老松町遺跡等) あるのみである。

このため、中世以前の遺跡の状況については、朝日ヶ丘遺跡と八十塚古墳群を中心にした記述に偏る傾向は否めない。ここでは特に、立地的に岩ヶ平刻印群と重複・関連することが多い八十塚古墳群を中心に記述し、それ以外の旧石器時代から中世にかけての遺跡状況については概略を述べるに止めることにする。

市域北東部周辺で人間活動の痕跡が最初に認められるのは、紅野芳雄氏により岩ヶ平で採集された国府型ナイフ形石器である。また、朝日ヶ丘遺跡第1・2次調査においても後期旧石器が出土しているが、残念ながら単独出土かもしくは流失包含層内からの出土であり、当該期の文化層は確認されていない〔村川 1966a〕。西宮市側でも老松3号墳(老松古墳)の羨道部流入土から横長剥片を原材とする国府型ナイフ形石器が出土している〔勇・藤岡・古川 1978〕。

縄文時代の遺跡としては朝日ヶ丘遺跡がある。同遺跡は縄文時代前期前半の爪形文土器が出土する単純遺跡と考えられていたが〔村川 1966a, 藤井・森岡 1974, 山中 1983・1984〕、昭和63年の第4次調査で多数の石器と前期の土器片を包含する層の下層から弥生土器・土師器片が出土したことで、これまでに検出された縄文時代の遺物の大半が二次的流失堆積層内の出土であることが判明した〔山中・森岡・和田・関野 1988〕。また、第4次調査の結果を踏まえて第1次調査で検出された竪穴状遺構についても再検討が必要となっている。

弥生時代に関しては、後期中葉の土器が朝日ヶ丘遺跡などで出土しているが、明確な遺構に伴って出土していない。ただし、当該地周辺では弥生時代中期に属する凸基有茎式石鏃や弥生土器が、発掘調査や表面採集等で出土しているため、今後弥生後期の集落などが見つかる可能性はあると思われる。

古墳時代になると、南方の翠ヶ丘台地上に、4世紀末の築造とされる前期古墳の阿保親王塚古墳を始めとして、5世紀後半に築造された中期古墳の金津山古墳(帆立貝形前方後円墳)、5世紀末から6世紀初頭の打出小槌古墳(前方後円墳)、実態不分明ながら6世紀代の横穴式石室墳と考えられる駒塚古墳や四ツ塚などが連綿と造墓されて一つのグループを形成している。しかし、北方の六麓荘・岩ヶ平台地周辺では、前期・中期の古墳は確認されていない。また、古墳時代の集落遺跡も現時点では検出されていない。

調査地周辺、つまり六麓荘・岩ヶ平台地上に本格的に古墳が築造されるのは古墳時代後期になってからである。横穴式石室を主体とする群集墳で、既に江戸時代の享保年間に『摂津志』にも記載されている八十塚古墳群である。同古墳群は、6世紀中葉以前に造墓活動を始める三条・城山古墳群よりやや遅れて群形成を開始した市内最大の群集墳で、芦屋市朝日ヶ丘町・岩園町・六麓荘町と西宮市苦楽園四番町・同五番町・同六番町の、東西約700m・南北約900mの範囲に分布している。内部構造は畿内の発展型群集墳に特徴的な横穴式石室単純で、主として地形的な区分から、朝日ヶ丘・岩ヶ平・老松・苦楽園五番町・剣谷の5支群に分けて理解されている〔勇・藤岡・古川 1978, 森岡・古川他編 1979, 森岡他 1983〕。これら5支群のうち古墳の遺存数や石室の規模・形態のバリエーション、さらには支群ごとの造墓期間などからみて、岩ヶ

平支群を中核にして展開していることが考えられる。その構造を理解するため、同支群をより小さい小支群に分けて構成単位を把握することも試みられている。

以下、個々の支群についての概略を記す。

朝日ヶ丘支群 南北に細長く伸びた朝日ヶ丘尾根の眺望のきく突端、標高91mの地点に2基の横穴式石室を主体とする古墳が存在していた。道路建設及び宅地造成工事に伴って昭和39年に発掘調査が実施されている。両墳とも石室の損壊が著しく1号墳は側壁の基底石のみ、2号墳は側壁の基底石と奥壁の一部が残存していた。1号墳の床面は粘土床、2号墳は石敷床と報告されている〔村川 1966a〕。出土した土器から八十塚古墳群で最も古く造墓が行われた支群である。注目すべき出土遺物としては、1号墳からは須恵器・土師器以外に刀子が検出された。また、2号墳からは垂飾付耳飾りと推定される断面六角形の純金製金環が出土している。

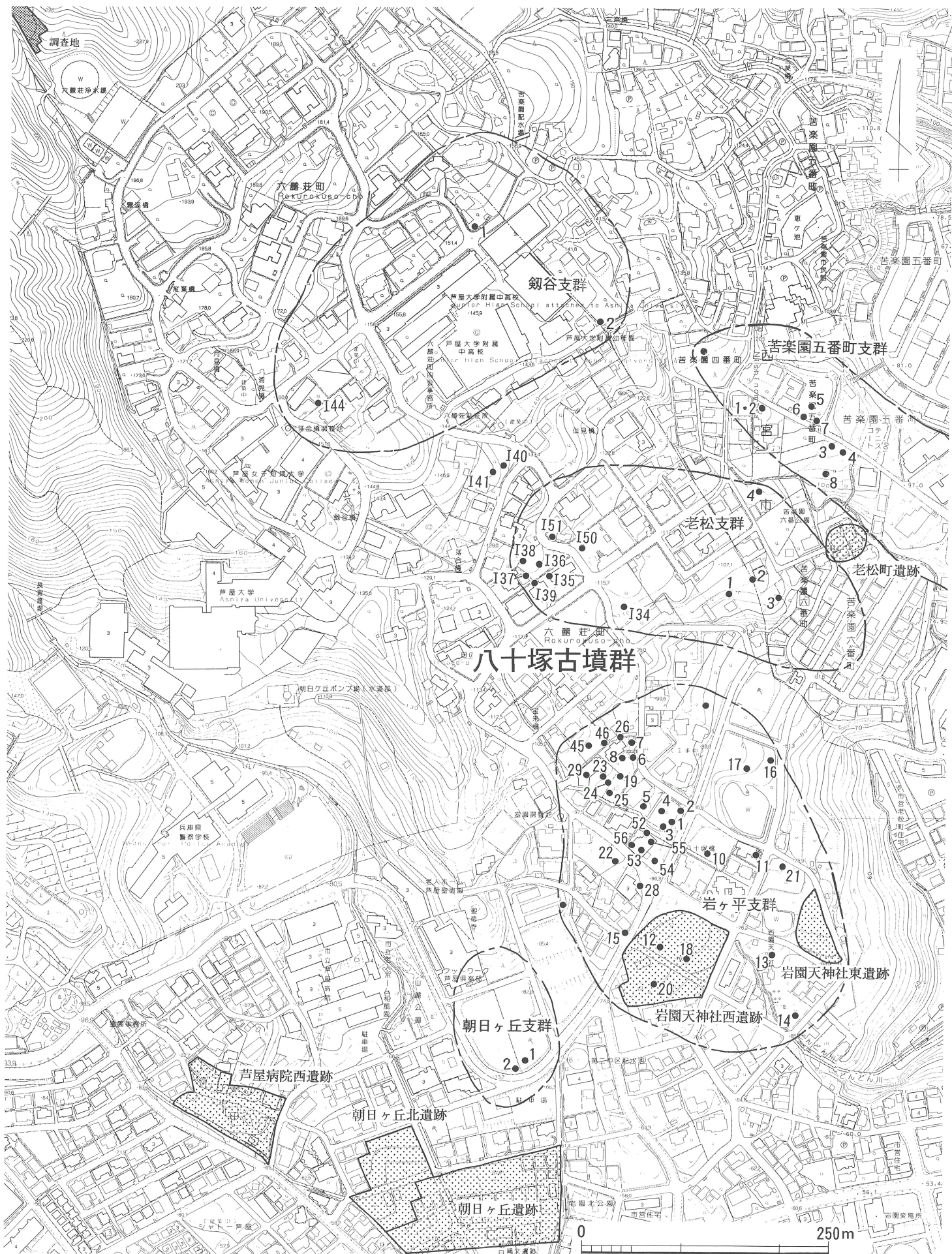
岩ヶ平支群 朝日ヶ丘支群の東側、六麓荘・岩ヶ平台地南部の、地形的には緩傾斜しながらも比較的平坦な部分を選んで立地している。標高65mから100m、東西250m・南北300mの範囲に集中分布しており八十塚古墳群中の最大支群である。

岩ヶ平支群は、各古墳の内容も複雑多岐にわたる。代表的な古墳を列挙すると大形石材を多用して全長10m近い石室を持つ1・8号墳や、小形石材のみを選んで壁体を構築している3号墳、そして、幅約0.6m、全長約2.3mの小型無袖式石室の55号墳や竪穴系小石室と呼ばれる横穴式石室が退化した石室形態の56号墳までを含み、造墓期間も本古墳群の成立当初から終末まで全期間に及んでいる〔森岡・古川他編 1979, 森岡他 1983, 関西大学文学部考古学研究室編 2002〕。

一方、支群内における古墳分布の状況を子細に観察すると、北西部における密集度が極めて高いのに対して、他は散在的な分布傾向を示している。そして、この密集度・隣接関係を根拠としてA～Hの8つの小支群に分けて考えられてきた。

しかしながら、1980年刊行の遺跡分布地図〔森岡編 1980〕において、朝日ヶ丘支群と剣谷1号墳以外のすべてを岩ヶ平支群に含めて一連番号をあたえたため、行政取扱上岩ヶ平〇号墳とされる古墳の分布範囲と、地形区分・分布傾向から判断される支群分けに齟齬が生じている。中でも、前記分布地図に記載される遺跡台帳に、次項の「老松支群」が存在せず、「岩ヶ平支群」に含めて古墳番号があたえられている。その結果、芦屋・西宮両市にまたがって分布する老松支群において、同一古墳の呼称が両市で異なるという矛盾が生じ、一方では八十塚古墳群全体に対する考古学検討の障害ともなっている。早期の是正が必要であろう。

老松支群 岩ヶ平支群のすぐ北に接し、芦屋・西宮市境を南東方向に短く伸びた尾根（老松尾根）の上面と南斜面、標高100m前後に分布する。老松尾根上には最低10基程度の古墳が存在したと思われるが、現状では芦屋市側に2基、西宮市側に2基、両市境上に1基、合計5基が確認され、このうち3号墳（旧1号墳、通称老松古墳）と4号墳が西宮市教育委員会によって発掘調査が実施されている〔勇・藤岡・古川他 1978, 西川 2000〕。特に3号墳（旧1号墳）は、全長6.34mのやや胴張り形式の右片袖式石室で、石室床面には地山を掘り込んでつくった排水



第11図 八十塚古墳群と六麓荘台地周辺の遺跡 (1/5000)

溝がみられる。築造年代は6世紀末から7世紀初頭と考えられている。

また、岩ヶ平支群の密集部から160m離れた地点で新たに検出され発掘調査された50号墳は、従来の行政上取扱いとしては岩ヶ平支群に含まれている。しかし、34～39号墳・50～51号墳は、地形的には老松尾根の基幹とみるべき地点に立地していること、岩ヶ平支群各小支群の群集する地点との間には地形的段差がみられること、そして50号墳後背の標高125～140mの部分にも地形段差がみられ、北方の剣谷支群とも地形上弁別可能なため、これらも老松支群の範囲に含めて考え、遺跡分布地図（第11図）に収載した。また同様の理由から、岩ヶ平44号墳とされる古墳も剣谷支群に含めることにした。

苦楽園五番町支群 八十塚古墳群の中で最も北東側を占める苦楽園五番町の尾根に所在する。この尾根の稜線は明確ではなく、上面は幅80mほどの緩斜面が南東方向へ下っており、そのうち標高110～116mの部分に数基の古墳が確認されている。このうちの5基については西宮市教育委員会が発掘調査を実施している〔村川 1966b, 勇・藤岡・古川他 1978〕。そのいずれもが全長5m前後、幅1m前後の小型無袖式石室で、7世紀前半の築造時期が考えられる。特に1・2号墳の石室については、1つの墳丘に2つの石室を構築した可能性が指摘されている。遺物についても八十塚古墳群において銀環の出土が目立つ中で、2・5・7号墳では金環が副葬されていたのは注目できる。

隣接する老松支群で当該時期の古墳が認められないことを考えれば、7世紀前半以降の老松支群から苦楽園五番町支群への墓域の移動が想定できる。

剣谷支群 芦屋市六麓荘町と西宮市苦楽園四番町にまたがり、標高140～155m付近の緩斜面上に立地しており、八十塚古墳群の内でも最北及び最高所を占める。芦屋・西宮両市教育委員会によって調査された1・2号墳のみが知られているが〔村川 1966a, 勇・藤岡・古川他 1978, 西川・合田 1991〕、昭和初年の六麓荘開発以前にはもっと多くの古墳が存在したともいわれている。調査された1・2号墳はいずれも遺存状態が悪く、玄室部のみを残す状態であった。出土した須恵器から7世紀前半代のもと考えられてきたが、玄室の構築方法から有袖式の石室とみられ、6世紀代築造の可能性も示されている。

その後、奈良時代以降～中世及び徳川大坂城再築以前の採石や遺跡の状況については、現状では不明である。ただ、八十塚古墳群の岩ヶ平支群第1・10号墳では、主に13世紀～14世紀頃に石室内で二次的利用があったことを示す瓦器碗が出土している〔村川 1966a, 森岡・和田・古川他 1990〕。また、岩ヶ平支群第13号墳では寛永通寶と江戸期の灯明皿が採集され、徳川大坂城再築以後も八十塚古墳群において二次的な利用があったことを示している〔森岡・古川他編 1979〕。

（濱野俊一）

Ⅳ. 徳川幕府による大坂城再築と

東六甲採石場

1. 徳川幕府による元和・寛永期の大坂城再築と石垣石

(1) 豊臣大坂城と徳川大坂城

大坂城といえば豊臣秀吉、秀吉と言えば大坂城を思い浮かべるほど、関西人、とりわけ大阪人にとって「太閤秀吉の築いた大坂城」はなじみ深い。「大坂城」の言葉で直接連想する現在の天守閣は、昭和天皇の御大典記念事業として昭和6年に再建された鉄筋コンクリート造りのものながら、外観は「大坂夏の陣図屏風」等に描かれた「太閤の大坂城」を基本に設計されている。すなわち大坂城は、徳川・関東・東京に対する、太閤びいきな関西・大阪アイデンティティーの象徴であり、大阪市に現存する歴史的文化遺産の代表といってさしつかえなからう。

ところが、文化財として今日私達が見ることのできる大坂城は、実は慶長20年（1615）の大坂夏の陣の後に徳川幕府が全面的再築を行ったものなのである。豊臣秀吉の大坂城は、少なくとも現在地上に残る堀や石垣などの遺構には見ることができず、発掘調査によって地下遺構として検出されるに過ぎない（第3図）。豊臣大坂城は、秀吉の権威を完全抹殺するが如く、建物を一つのこらず取り壊し、石垣もすべてを地中に埋め込み、徳川幕府によって地上から消滅させられたのである。そして、その上に一回り大きく、いわば再築城されたのが現在みられる大坂城にほかならない。言い替えれば、豊臣権力の象徴を消し去り、新たに生まれた徳川幕府の権力と権威を大坂・西国の人々に見せつけるという役割を担って築かれたのが現存の徳川大坂城なのである。

その徳川幕府による再築工事は、家康没後の元和6年（1620）に始まって、寛永元年（1624）・寛永5年（1628）の三期にわたり、西国の大小64家の大名が参加するいわゆる「天下普請」で実施された。「天下普請」とは、幕府の命を受けた各藩が、それぞれの石高、即ち国力に応じた工事を分担することである。城普請は、戦においてそれぞれの所領の大きさに応じた兵員数と武器・武具・兵糧を自ら携えて参陣する軍役と同等のものと見なされ、通常はそれを「割普請」と呼んでいる。そのうち、幕府権力の命によって築かれ、複数の藩が助役として参加する城の割普請のことを、特に「天下普請」と称する。大坂城以外では、名古屋城や江戸城の天下普請が著名で、関西では丹波の篠山城も天下普請で築かれている。

具体的に大坂城の石垣工事については、幕府の普請奉行から割り当てられた担当丁場については、石材の確保・採石・運搬から築造工事に至るまで、それぞれの藩の負担と責任で進

表1 大坂城再築石垣工事担当大名一覧

工事着手年月及び場所、間数 (間・尺)							担当間数 合計 (間・尺)	工事担当大名		主要刻印
1期工事		2期工事		3期工事		所領及び領知高		氏名		
元和6年正月 (1620)	元和8 (1622)	寛永元年正月 (1624)	寛永5年2月 (1628)	寛永6 (1629)	二之丸 南面				二之丸 玉造内	
三之丸	三之丸 西北東 三面	本丸 天守台	本丸	山里丸						
357・00	685・12.60		102・04.71	458・10.5			1904・44.107	加賀金沢藩 1,193,000石	松平筑前守 前田利常 金澤中納言	卍 中 田
						302・16.297				
	161・10.60	147・00					308・10.600	肥後熊本藩 731,800石	肥後守 加藤忠廣	◎
65・00	320・16.30						395・16.300	越前福井藩 670,000石	越前宰相 松平忠直	ㄥ △ ∞ ∞
	61・04						213・13.730	筑前福岡藩 512,000石	筑前守 黒田長政 松平右衛門佐 黒田忠之	◎
	130・06.30		69・06.10				209・13.650	豊前小倉藩 399,000石	越中守 細川忠興 越中守 細川忠利	◎ ◎ ◎
	113・09.40	63・01.00					227・18.295	長門 萩藩 369,000石	松平長門守 毛利秀就	〇
	142・08.10	21・00.00					254・24.420	肥前佐賀藩 357,000石	信濃守 鍋島勝茂	☐ ☐ ☐
84・00	50・00.00	106・02.00					356・10.450	伊勢 津藩 323,900石	和泉守 藤堂高虎	
	36・00.00						36・00.000	筑後久留米藩 320,000石	筑後守 田中忠政	卍 田
	158・13.50	59・00.00					254・21.130	因伯鳥取藩 320,000石	松平新太郎 池田光政	ㄥ ◊
	164・04.00	93・04.00					359・09.620	備前岡山藩 315,000石	松平宮内少輔 池田忠雄 備前宰相	
						102・01.620				
		28・03.00					104・09.296	阿波徳島藩 257,000石	松平阿波守 蜂須賀忠英	卍
	102・04.00	24・03.00					145・09.250	出雲松江藩 235,000石	山城守 堀尾忠晴	☉
	29・07.20						116・07.500	丹波福知山藩 80,000石 筑後久留米藩 210,000石	玄蕃頭 有馬豊氏	☐ ☐
						87・00.300				
	67・03.60						67・03.600	土佐高知藩 202,000石	松平土佐守 山内忠義	☉
	50・06.80	13・03.00					63・09.800	伊予松山藩 200,000石	左馬助 加藤嘉明	十
	96・07.00	41・00.00					167・12.120	美作津山藩 186,000石	美作守 森 忠政 右近大夫 森 忠廣	△
						30・05.120				
	37・01.75						157・19.510	讃岐高松藩 170,000石	讃岐守 生駒正俊 小法師 生駒高俊	☉
		88・11.00								
						32・06.760				
	34・01.30	30・07.40					74・12.180	肥前唐津藩 123,000石	志摩守 寺澤廣高	● ㄥ ㄥ
		15・03.50					30・10.605	筑後柳川藩 110,000石	飛騨守 立花宗茂	☉
	24・06.90						52・23.034	伊予宇和島藩 100,000石	侍従 伊達秀宗 遠江守	
		15・07.70								
56・01	57・06.00	40・03.00					163・12.960	若狭小浜藩 92,000石	若狭守 京極忠高	☐ ☐
9・03	55・02.00						103・14.800	丹後宮津藩 78,000石	丹後守 京極高知 采女正 京極高廣	卍 丹
		29・05.80								
						10・04.000				
	23・03.00	6・05.00					40・14.910	豊後竹田藩 70,400石	内膳正 中川久盛	△
1・01	20・03.00	19・08.20					47・21.620	伊勢神戸藩 70,000石	監物 一柳直盛	☉ 柳
	7・01.70	19・07.49					36・16.470	備前松山藩 65,000石	備中守 池田長幸	☉ ☉
	8・08.00						29・10.030	播磨山崎藩 63,000石	松平左近 池田輝澄 松平石見守	☉
		16・02.00					5・00.030			
	19・06.60	21・00.00					52・12.610	肥前平戸藩 63,000石	肥前守 松浦隆信	☉ ☉
	16・00.00	9・01.00					36・11.530	豊後日田藩 60,000石	主殿頭 石川忠總	
		27・04.20					38・09.550	伊予大洲藩 60,000石	五郎八 出羽守 加藤泰興	☉ ☉
						11・05.350				

工事着手年月及び場所、間数 (間・尺)							担当間数 合計 (間・尺)	工事担当大名				主要刻印
1期工事		2期工事		3期工事				所領及び領知高	氏名			
元和6年正月 (1620)	三之丸 西北東 三面	元和8 (1622)	寛永元年正月 (1624)	本丸 天守台	山里丸	寛永5年2月 (1628)				寛永6 (1629)		
				二之丸		二之丸						
				南面	玉造内	玉造内						
	23・01.00		15・06.50			8・02.630		46・10.130	日向飢肥藩 57,000石	修理太夫 伊東祐慶		
			4・10.00			8・10.120	10・00.0	22・20.120	石見濱田藩 54,000石	兵部少輔 古田重恒	☉	
			17・03.90					17・03.900	美濃高須藩 53,700石	左馬助 徳永昌重		
	19・06.00		8・05.13					41・16.850	日向延岡藩 50,000石	左衛門佐 有馬直純 藏人 有馬康純	☺	
	17・06.60		9・04.00					34・14.700	豊後臼杵藩 50,000石	彦六 稲葉典通 兵部少輔 稲葉一通	☉	
	6・00.20		9・09.40			4・06.938		19・16.538	備中成羽藩 50,000石	甲斐守 山崎家治	山 山	
			27・03.00			13・06.980		40・09.980	肥前島原藩 50,000石	豊後守 松倉重政		
			25・03.00					25・03.000	但馬出石藩 50,000石	大和守 小出吉英	☺ ☺ ☺	
			19・06.17			7・06.000		26・12.170	丹波福知山藩 45,000石	淡路守 稲葉紀通	☉	
	9・03.00							9・03.000	石見津和野藩 43,000石	大力 亀井茲政		
	4・00.00		6・00.50			7・05.020	2・00.0	19・05.520	丹波柏原藩 36,000石	刑部大輔 織田信則		
	10・09.00		12・04.00			8・03.700		30・16.700	播磨赤穂藩 35,000石	松平右京大夫 池田政綱	☺ ☺	
			15・00.00			6・06.160		21・06.160	丹後田邊藩 35,000石	修理太夫 京極高三		
	9・00.00		5・00.00			7・01.240		21・01.240	但馬豊岡藩 35,000石	伯耆守 杉原長房		
	7・09.00		9・02.00			5・07.650	8・00.0	29・18.650	大和高取藩 30,000石	因幡守 本多正武	☉	
	5・00.70		10・03.90					22・06.884	備中庭瀬藩 30,000石	肥後守 戸川達安 土佐守 戸川正安		
	2・03.00		4・00.00					6・03.000	大和宇陀藩 30,000石	兵部大輔 織田信良		
			10・06.40					13・13.820	丹波園部藩 30,000石	信濃守 小出吉親 対馬守	☺	
						3・07.420		26・11.600	日向高鍋藩 30,000石	長門守 秋月種春		
	18・01.10		3・00.54			5・09.960		17・12.160	豊後日出藩 30,000石	右衛門大夫 木下延俊	木 ㊦	
	11・07.30		1・03.00			5・01.860		33・10.090	日向佐土原藩 30,000石	右馬頭 鳥津忠興	☺	
	12・00.60		10・03.54			11・05.950		27・11.775	大和龍田藩 28,000石	出雲守 片桐孝利		
	10・00.00		10・04.50			7・07.275		34・14.670	肥前大村藩 27,900石	民部大輔 大村純頼 松千代 大村純信	㊦	
	14・07.60		11・02.40			9・04.470		14・12.150	美濃八幡藩 27,000石	但馬守 遠藤慶隆		
	4・02.60		15・09.69			4・03.280		19・15.570	大和谷山藩 25,000石	加賀守 桑山貞晴		
			6・00.00					9・03.800	播磨作用藩 25,000石	松平小七郎 右近大夫 池田輝興		
						3・03.800		16・06.595	近江大溝藩 20,000石	左京亮 分部光信		
	13・02.00		2・08.00			2・11.380		17・21.380	豊後佐伯藩 20,000石	伊勢守 毛利高政	☺	
			9・03.00					9・03.000	近江仁正寺藩 17,400石	伊豆守 市橋長政		
			4・02.20			4・02.620		8・04.820	大和新庄藩 16,000石	左衛門佐 桑山一直		
	8・05.90		8・30.00					18・11.770	豊後森藩 12,500石	右衛門市 越後守 久留島通春	☺	
	5・08.30		5・00.00			3・02.450		13・10.750	伊勢薦野藩 12,000石	丹後守 土方雄氏		
			5・04.60			0・08.605		5・13.205	美濃野村藩 10,000石	河内守 織田長則		
			5・03.50			4・05.700		9・09.200	筑後三池藩 10,000石	主膳正 立花種次		
			4・00.50					6・08.690	美濃徳野藩 10,000石	牛右衛門 石見守 平岡頼資		
						2・08.190						

められたわけである。

表1は、『大坂城の謎』〔村川1970,同2002〕のP159～P163に掲載された、石垣工事参加大名の一覧表を筆者の責任で再編集したものである。この表を眺めてみると、工事に動員された65家の大名が、大は1,193,000石の加賀金沢藩前田家や731,800石の肥後熊本藩加藤家から、小は美濃野村藩・筑後三池藩・美濃徳野藩のようなわずか10,000石の藩まで、実に様々な内容をもっていることがよくわかる。しかし、基本的には何らかの形で豊臣秀吉と縁をもって所領安堵されたり、子飼いの家臣から取り立てられ成長してきた大名家がほとんどであり、例外は特殊な事情を抱える徳川御家門の越前福井藩松平家（670,000石）と、譜代の大和高取藩本多家（30,000石）のみである。それら豊臣家に親近感を持つ西国の外様諸大名は、豊臣家を滅ぼした直後の幕府からみれば将来へ不安定要因にほかならない。つまり、それら豊臣系大名とその家臣に、自ら徳川幕府の大坂城工事に参加させることにより新しい徳川権力を実感させると同時に、莫大な出費によって諸藩を経済的に消耗させるということも、大きな目的の一つであったろう。

(2) 現存大坂城石垣と採石丁場

そのような意図のもとに再築城された徳川大坂城の石垣が、まさに現存する巨大な大坂城の石垣なのである。

この石垣に使用された石材の総量は、二百万個とも四百万個とも推定され、小豆島・塩飽諸島・笠岡諸島・前島・犬島・宇野・下津井等、瀬戸内の島々や備前沿岸部で、熊本藩加藤家・福岡藩黒田家・小倉藩細川家・金沢藩前田家・松江藩堀尾家・福井藩松平家・岡山藩池田家・徳島藩蜂須賀家等々、多数の大藩の採石場が見ついている〔志村清 1970, 中村博司 1979, 内海町教育委員会編 1979, 藤井重夫 1984〕。

ところが、長年大坂城石垣の刻印調査を続けておられる藤井重夫氏によると、使用された石材のうち最も多いのは六甲山系のもの（六甲花崗岩・御影石）であろうといわれる。つまり、現存石垣の調査結果からみれば、大坂城石垣石の供給地として著名な小豆島をはじめとする瀬戸内の島々を押さえて、実は六甲が最大の石材供給地であったと考えられるのである。

六甲の花崗岩は、淡いピンク色の長石が特徴的で、類似の中国型花崗岩は岡山・広島両県に広範な分布をもつが、採石場の多い瀬戸内の島々や生駒山系に分布する領家型花崗岩とは、鉱物の組成・粒径や色調が明らかに異なって区別可能であること、中国型花崗岩のなかでも六甲花崗岩の色調がきわだっていることから、実際の石垣調査においても識別することができるのである。

ちなみに六甲の花崗岩は、江戸中期以降も盛んに採石され、主に御影の港から大坂へ運ばれて大坂で加工した石灯籠や狛犬などが全国に移出された。その結果、銘石「御影石」の名が全国的に著名なものとなり、今日では御影石＝花崗岩として普通名詞化してしまっている。

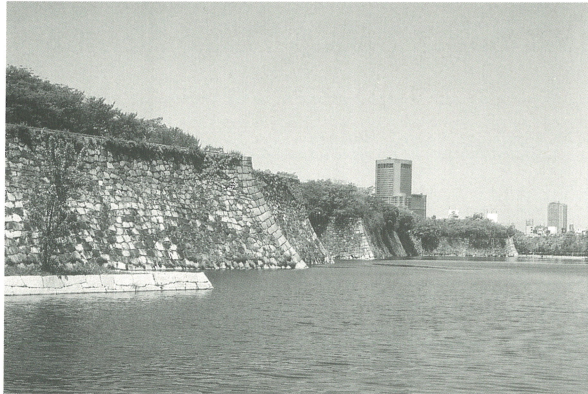
一方、現存大坂城を歩いてみるとその巨大さに圧倒される思いである。一般の観光客は、天守閣に登って本丸周辺を散策する程度で、大手枳形内や桜門内の巨石は物珍しく眺めるである



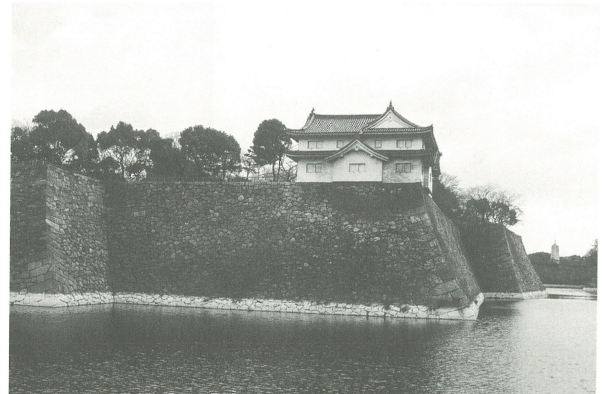
①南内濠内壁（南西から）



②南内濠内壁毛利家丁場近景



③東外濠内壁の現状（南から）



④西外濠乾槽付近



⑤東外濠福井藩松平家刻印



⑥山里丸刻印石公園「あしや」刻印石



⑦南内濠唐津藩寺澤家刻印



⑧山里丸刻印石公園唐津藩寺澤家刻印

第12図 現存大坂城の石垣と刻印